もっと知りたい ふるさと ⑥⓪

打沢の馬鳴尊（めみょうそん）

打澤神社の境内にある馬鳴尊の石碑は、高さ143センチメートル・幅105センチメートル・厚さ30センチメートルの玢岩（ひんがん）に、行書で「馬鳴尊」と刻字してある。

建立は天保6年8月とされ、その背景には寛政13年に塩尻村を中心に上田村・打沢村など舟山地区の蚕種業者により結成された「神明講」があった。打沢村の竹内屋宗十郎が寄進した記録があり、養蚕家の崇敬を集めたと考えられる。

馬鳴とは「広辞苑」によれば2世紀頃のインドの仏教詩人で、バラモン教から仏教に帰依し、カニシカ王の保護を受けて仏教興隆に尽力し「仏所行讃（仏陀釋尊の生涯を記した物語）」「大壮厳論経」「大乗起信論」「犍稚梵讃（けんちぼんさん）」などを著したとの記載がある。

他には『仏陀の生涯「仏所行讃」を読む』（平川彰著、平成10年3月発行）に詳しい。名はサンスクリット語でアシュバゴーシャといい、元々は上流階級バラモンの学者であった。仏教を非難し富那奢と論争したが論破される。死をもって詫びようとしたが、諭されて弟子入りしたという。前述の著書は、430年頃曇無讖（どんむせん）により中国へもたらされ、そのとき馬鳴と訳されている。

更に『蠶神考（さんしんこう）』（村島渚著、昭和8年3月発行）の第5章「仏教上の蠶神」に、馬鳴と彼の誓いの記述がある。要約すると「大神力無比験法稔誦儀軌に釋迦如来菩提樹の下に座して申します。われ仏法を荘厳し、貧しい人、困っている人、身分の賤しい人、又裸の人々に衣服を与えんが為、限りなく菩薩の業に励み常に家や国土に大光明を放ち美しい絹地や綿地の織物の衣服を成就愛用せしめん」となる。また、中国唐代の「宝林伝」（9世紀頃）にも「昔天竺に一馬国あり。人皆毛を生じて声馬の如し、馬鳴菩薩かつて蚕虫を作って口より糸を出し人をして衣を作らしむ」とある。馬鳴は、仏教の養蚕守護者として定着し、中国から日本へ伝えられたものであろう。

日本の養蚕は、秦の始皇帝12世の孫功満王が京都の嵯峨野周辺に移住し、養蚕織物を広めたことが始まりとされる。王の一族は仁徳天皇より波陀（はだ）の姓を賜り、後に秦氏と称する。京都市右京区太秦（うずまさ）の広隆寺には馬鳴堂と像があり、同地を中心に養蚕が盛んであったことがうかがえる。

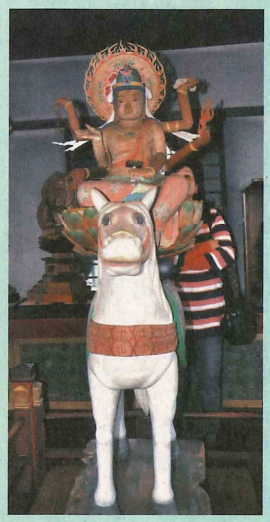
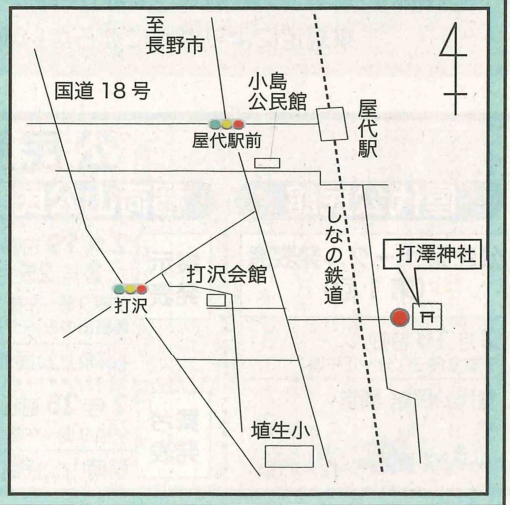
筆者が初めて馬鳴菩薩像に接したのは須坂市だった。当時の須坂市立博物館長湧井氏と製糸の町須坂について対談し、蚕神の菩薩像のことを尋ねると、縦76センチメートル・横26センチメートルの蠶祖神の掛軸を倉庫より出していただき、拝観することができた。常陸国蚕影山別当桑林寺にあった彩色の掛軸で、六臂の腕に桑の枝・糸巻繭玉・秤・蚕虫などを持ち、馬に跨り金冠をつけ、赤い絹布をまとい紫雲に乗る姿は、養蚕農家の信仰の対象にふさわしい。

菩薩像は、県内では飯田市の立石寺・雲彩寺などにある。近隣では山梨県の甲斐善光寺に蚕児菩薩（別名摩利支天像）が、さらに群馬県の正楽寺・信照寺・成孝院・長寿院にも像がある。筆者は正楽寺と長寿院で菩薩像を拝観したが、立派な像であった。

打沢　牧　忠男

馬鳴尊の石碑

蠶祖神の掛軸
（須坂市立博物館所蔵）


群馬県長寿院の馬鳴菩薩像